

2021年3月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 54

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

ベトナム防災事業の 2年目が開始しました

ベトナムは災害多発国で、近年は経済成長や気候変動に伴い被害が拡大する傾向にあります。2020年から事業を実施しているCWS Japanの対象地域では人口の8割が少数民族で、人々は農業に依存しており、ベトナムのなかでも特に開発が遅れている地域：チエムホア県です。チエムホア県では、洪水や土砂災害による農地の破壊、物流網の寸断、家屋の損壊などの災害が人々の生活に与える影響は大きく、地形的にも樹枝状に発達した河川が複雑な流路網を有し、豪雨時におけるベトナム北東部の遊水地となっているため、毎年のように被害が発生しています。

このような状況に対して、わたしたちは2020年から、外部専門家の協力のもと、災害リスクアセスメント研修をオンラインにて実施しました。現地パートナー団体であるCWS Vietnamが現地にて参加者に対する通訳、議論の活性化、現地の文化や環境に則したより理解しやすい研修内容の伝達を行い、オンラインの研修であっても、研修内容に理解が十分に得られるようにしました。そのほかに、実地研修からオンライン研修へ変更したことによる研修内容への理解度低下を避けるため、参加者間での相互な議論の場を設けたことで、活発な議論や質疑応答、意見交換が行われました。そして、理解促進のために継続的な課題を設けたことで、課題提出を通した

OUR SNS IS ACTIVE!

FACEBOOK

TWITTER

INSTAGRAMでも

情報発信しています!

最後のページを
ご覧ください



研修参加者の理解度の確認を行うことができました。また、議論をした結果、それぞれのコミュニティにおいて頻発する災害の特質を理解するなかで、その災害の経済的被害が大きいにもかかわらず、コミュニティの人々による防災への必要なアクションが取られておらず、効果的なリスク削減行動が行われていないという課題があることが判明しました。

これまでの活動を踏まえて、今年開始する2年次では、各地域にて頻発する災害リスクに対しコミュニティレベルで具体的な対応策がとれるよう、ハザードマップ作成及び運用に関する政府関係者への技術移転（どのような災害がどこで発生しているか住民がわかるように可視化し、定期的に情報更新すること）に加え、各対象コミュニティにおける人民委員会等による防災マップ作成（コミュニティ内のリスクの高い箇所を検分し、住民ができる減災方法を検討し、リスクとリソースをマップに落とし込むこと）を目標としています。

新型コロナウイルス感染症の終息が未だ見えないなかでの、事業の実施となりますが、感染リスク軽減に十分に努めたうえで、目標達成のためにできる方法を現地の人々と模索したいと思います。

（文：プログラム・オフィサー 西澤紫乃）

JANIC主催HAPIC2021に登壇しました

2月14～16日にかけてHAPIC（Happiness Idea Conference：日本の国際協力業界で最大のコンファレンス）が開催され、CWS Japanは2つのセッション（「気候危機とDRR～仙台での約束を果たすために～」と「NGOとの連携でインパクト拡大を目指す！セクター横断ぶっちゃけ対談」）に登壇しました。

昨今、甚大な自然災害が世界各地で頻発する中、日常の活動により被害を軽減する「DRR（防災・減災）」の重要性が高まっています。



写真：HAPICにおけるオンライン発表風景

「気候危機とDRR～仙台での約束を果たすために～」のセッションでは、発効から6年が経つ仙台防災枠組の達成へ向けた進捗状況を確認するとともに、NGO、ODA、企業など各セクターの取り組みや連携事例を知り、仙台防災枠組、SDGsの達成に向けた課題、今後の取り組みについて東北大学、シャプラニール、国際協力機構(JICA)の皆様と議論しました。

CWS Japanからはパキスタンで実施している干ばつ対策防災事業の発表を行い、国土防災技術（株）の皆様との協働、コミュニティに焦点を当てながらも、持続性を考えた技術協力・技術移転、干ばつに有効なモデルを構築・証明後のスケールアップ等の取り組みについてお話をしました。気候変動の影響も重なり、今後干ばつは地域を超えた重要な問題です。非常に難しい課題ですが、だからこそ、企業の知見、アカデミア・現地研究所の知見、NGOの知見やコミュニティの知見全てを総動員する必要があると考えていますし、それが意味、仙台防災枠組で提唱されているマルチセクターアプローチの実践だと思っています。今後、更に事業のエビデンスを分析し、モデル化に繋げ、継続的に広く発表をしていきます。

「NGOとの連携でインパクト拡大を目指す！セクター横断ぶっちゃけ対談」はCWS Japan有志メンバーとして参加しているNGO2030というグループで主催しました。

"更に社会的なインパクトを生み出し、SDGsの達成を考えるためにも、様々な分野でセクターを超えた協働関係を構築する必要があると思います。"

このグループは、外務省のサポートも頂き「2030年を見据えた日本の国際協力NGOの役割：3つのあるべき姿と10のアクションプラン」というレポートを出しており、2030年を見据えNGOセクターのあるべき姿を模索し、その変化に向けたカタリストとなることを目的としています。この調査レポートでも明らかになったように、社会の諸課題に接するNGOは「課題解決を推進するプロデューサーとしての役割」が期待されており、他セクターとの戦略的連携が必須です。このセッションでは朝日新聞、三井化学株式会社、笹川平和財団、ジャパン・プラットフォームを含めNGO2030のメンバーと議論を深めました。

CWS Japanの事例共有では、アフガニスタンでの防災事業の発表を行いました。多くの国がそうであるように、アフガニスタンにおいても、災害が発生したあとの対応ばかりに着目し、防災・減災にまで目が向けられてきませんでした。結果、崩落のリスクがある崖なども特定されず、2014年には一瞬で2000人が犠牲になる土砂災害が発生するなど、防げるリスクで命を落とす人が多いのが現状です。課題分析をしてみると、災害リスクの評価が十分にできていないこと、災害リスク情報を伝達する仕組みが整備されていないこと、防災・減災に関して進むべき方向性が明確になっていないことなどが主要課題として浮かび上がり、それぞれの課題に対して、対応案や活動案を模索しました。結果、ハザードマップ・防災マップの作成や減災知識の普及啓発、政策提言などが主な活動として設定されました。ただ、ここで問題だったのが、

技術の課題、知識・仕組みの課題・政策の課題があり、NGOだけで解決できる問題ではなく、重要なのは誰とどう組むか、でした。例えば技術・リソースの課題に関しては国土防災技術（株）の皆様に伴走して頂き、外務省のNGO連携無償資金協力を活用しました。これら全て現地NGOとのパートナーシップのもとに行い、知識・仕組みの課題に関しては現地コミュニティの委員会やテレビやラジオなどのメディア、学校などと協働しました。政策の課題に関してはアフガニスタンの国家災害管理省、議員などにも加わって頂きました。これら全てのステークホルダーとは、最初から密接な関係にあったわけではありません。振り返ってみると、やはり共感ポイントがそれぞれあり、それぞれの強みを活かして初めて必要なインパクトが生み出せることを学びました。

私達が防災事業で各国に伝えたいことは、防災減災にはサイエンスがあり、人の命を救える余地がまだまだたくさんあるということです。私達も事業を通じて、社会を巻き込んでインパクトを出す時の、セクターを超えた連携、それを可能にする共感づくりなどが不可欠であることを学んでいます。

2030年に向け、更に社会的なインパクトを生み出し、SDGsの達成を考えるためにも、様々な分野でセクターを超えた協働関係を構築する必要があると思います。そのためには他セクターとの共感・協働ポイントや可能性を更に学び、その協働をどうやったら可能にできるかを模索する必要があります。CWS Japanでは引き続き、積極的にこの分野を掘り下げて事業における実践をしていきます。

（文：事務局長 小美野剛）

高校生向け防災講座を開催しました

今年の2月から3月にかけて、高校生向け防災講座を計5回にわたりオンラインにて実施しました。

先だってCWS Japan職員が参加した、学生団体によるイベントの参加者であった奈良県の高校生団体から、防災について学ぶ機会が欲しいとの連絡をもらったことをきっかけに、この講座は生まれました。



写真：CWS Japan防災講座フライヤー

本講座は、防災を4つのテーマー ① 地球規模課題としてのレジリエントな社会の構築・防災の潮流、② 人道支援の質と説明責任、③ 災害に強い地域づくり、④海外における災害後の復興支援と防災力向上支援ーに分け、各テーマに詳しいCWS Japan職員がスピーカーとなって経験や知見を共有し、最終の5回目に、高校生参加者によって防災アクションプランのプレゼンテーションを行う、というプログラム構成になっています。4つのテーマという切り口で、災害とは何か、世界で起きている災害、市民のための仙台防災枠組み、人道支援の質や定義、被災者中心の支援とは、CWS Japanの災害支援経験から得た学び、災害に強い地域力＝共助の大切さと社会資源、復興支援の3つのキーワード（包摂性、適切な避難、エンパワーメント）、地域を守る避

難、といったトピックについて講義は進められました。参加者である高校生に災害や防災への興味を持ってもらえるよう、スピーカーである職員は、実践演習やこれまでの災害支援活動の事例を織り交ぜたり、写真や動画を使って、できるだけ分かりやすくトピックについて説明することを心がけました。

高校生にとって理解するのにやや難しい内容もありましたが、知識や理解は深められたようです。オブザーバーとして参加した私自身も新たな気づきや情報を得ることができ、プレゼンテーションの教材を参考にして、小学校5年生になる娘とも防災について話したりしました。

オンラインであったこと、また参加人数が少数だったこともあって、今回はインテンシブでより双方向的な講座となりました。最終回では、これまでの講座をふり振り返り、学んだことや取り組みが継続していかれることを意図して、参加者自身に「わたしの防災アクションプラン」のプレゼンテーションに取り組んでもらったことで、災害や防災をより自分事としてとらえてもらえた気がします。

高校生が防災について学ぶ機会を提供し、大学での学びの一助となることをねらいとして本講座を実施しましたが、「勉強をしていく上でまた講義をしてほしい」という感想も寄せられ、参加者の要望に十分応えることができたのではないのでしょうか。

これから、より多くの学生や若者に災害支援や防災について関心を持ってもらい、災害時の共助の輪を広めていくのに、今回の高校生向け防災講座は大いに活用できるという手ごたえを強く感じました。

（文：スタッフ ライン 静香）